

平成 29 年度 入学者選抜試験問題

100 点
50 分

国 語

実施日時：平成 29 年 1 月 19 日（木） 9:00～9:50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記の2つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2項目の全てに記入またはマークする。
 - ・受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
 - ・氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

— 開始後 —

1. 問題は4ページから20ページまでの各ページに印刷されており、第1問～第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3

と表示のある問いに対して2と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号3の解答欄②をマークする。

〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際はHBの鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後30分間および試験終了5分前は退出できない。

受験番号

--	--	--	--	--	--

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

体液の流れみたいな柳田国男の文体を読みすすんでゆくと、きつとあるところまできて、既視現象にであった気分がさそわれる。あつ、この感じはいつかもあったとおもうのだが、かたちがあたえられないうちに、その瞬間が通り過ぎてしまう。この思いはいつもおなじだ。この瞬間の既視体験の感じに X をあたえられたらというのは、ながいあいだの願いみたいにおもってきた。だがここが既視現象みたいなゆえんだが、この瞬間の感じは、反省的な姿勢にはいると痕かたもなく消えてしまう。いまここで柳田国男を論じようとしているのだから、すこし道具だてを準備して、この既視感の瞬間を言葉でとらえなくてはとおもう。

そこでノートを手元においてメモしながら、既視現象の感じにであう瞬間をつかまえようとした。こんどはいくつかの個所でうまくその瞬間をつかまえたとおもった。どうしてもそこからはじめなくてはとかがえる。だがこの既視の感じは、その瞬間をメモにしたノートをまえに、論理的な構えをすると、ほんとうは興奮が過ぎてしまったのに、無理して興奮のさ中にあるのを装っているみたいなき空虚におそわれる。これではとてもうまく言葉が流れてくれそうもない。でもとにかくそこからはじめなくてはならぬ。(a)、柳田国男の文体と方法があたえる流れが連続する感じ、たしかにここにかれの思想の核心があるという感じを、言葉にできないままに、かれの民俗学的な業績などを分類したりして、白けた論理をはこぶことになる。柳田国男の民俗学的な成果など、できれば論じないで済ましておきたい。ただわたしに既視の感じをしいるかれの文体と方法にはかたちをあたえたいのだ。

たとえばこんなことがある。

柳田国男が日本の村里の婚姻の風習にふれながら、その風習がどんな動機で移りかわっていったか説きあかそうとする。その言葉は理路をぬきにして事実を忠実にしるすのでもなく、理路をさきだてるあまり事実を無視して抽象にはしるのでもない。また村里ごとの婚姻風習の資料を、たんねんにあつめて実証的に分類し、そのうえで論理的な結論をあたえるのでもない。ある固有の熱い思いを結び目において、織物を織りひろげてゆくようなものだ。たて糸は事実の糸であり、よこ糸は理路の糸であるとしても、固有の熱い思いの結び目にあわなにかぎり、事実も理路も使われぬまま捨てられてゆく。それをたどりながら、しだいに柳田の固有の思いに結びついたわが村里の婚姻の風習にひきこまれ、しだいに深層に Y センコウしてゆくような、内部からの感覚をおぼえる。そのときだ、既視現象のような、あるひとつの像 ^{イメージ} がいつもやってくるのは。柳田国男がここでわたし(たち)をひきこんでゆくわが村里の婚姻風習の世界は、いわば Y だ。書きしるしていく柳田国男の文体も、それを読んでひきこまれてゆくわたし(たち)

の方も、ほら、あらたまって言わんでもわかるだろうといった内証ごとの世界にはいった感じで、〈読むもの〉と〈読まれるもの〉の関係にはいつている。いわばかれの方法も文体も読者の無意識が、村里の内側にいる感じをもつことをあてにし、それを前提に成り立っている。その魅力（魔力）にひきこまれてゆくかぎり、読む者はまちがいなく、日本の村里の習俗の内側にいるという無意識をかきたてられる。それがわたし（たち）に既視現象みたいな感じをあたえる理由だとおもえる。

わたしがこの瞬間に既視現象の内部にありながら、同時に想像力をふりしぼって、いま柳田国男がしるし、現にわたしがひきこまれている村里の婚姻の風習を、外部からみている視線を想像してみる。その視線からはこの風習は、環オセアニア圏の島嶼であり、同時に東南アジア、東アジア、シベリア沿海で大陸に接した小さな列島の原住民の婚姻風習としてみえる。この外視鏡に映った婚姻風習は、内部にいるわたしの視線とまったくちがった像イメージになってみえるはずだ。わたしの内視鏡に映ったわが村里の婚姻風習と、外視鏡からみえるはずのおなじ婚姻風習の像のあいだには、ひとつの〈空隙〉がある。そして柳田の文体は、ときに読むものにこの〈空隙〉の存在を(4)カンキするのだ。

この〈空隙〉は「いわば既視空間ともいうべきものだ。わたしの言葉がそれを描写しようとする〈またいつも感ずるあれだ〉という既視感のなかで表現を喪うしなってしまう。そしてかたちのない既視感情の反復のなかにいる。この〈空隙〉の像に論理をあたえることは、柳田国男がわたしにしてくるいちばんつよい思想だ。それはまた柳田国男の方法と文体がもっているつよいカンキ力だとおもえる。もうすこしだけ、この問題は追ってゆける。」

a それが年進んで村も狭く、もはや此上このうえの家増加を希図するにも及ばぬ事となつて、先づしうしやう少々遠方迄に知られて居る家から、追々に子女を部落の外へ送り出すこととなつた。それが自然に利害共同の区域を弘めたことにもなつたらうが、武家が所謂政略軍略の婚姻を企てるやうになつたのは、寧ろ応用の一種に過ぎなかつたと思ふ。

b 變つて来た一つは婚姻が夫の家に於て始まるといふことである。即ち嫁入が無い限りは、婚姻はまだ成立たぬもの様に考へる考へ方である。是は民法の同居義務の解釈が之を支持するやうになつて、今では*略々動かぬものになつて来たらしいが、以前は嫁入の前に既に聳入むしこといふものがあつて、時としては其中間の時が二年三年も続いて居たのである。主婦にはまだならない嫁といふものの存在、即ち第二の重要な変化が是に伴なうて居たことは想像せられる。

c 日本の婚姻慣習の土地毎に又職業境遇毎に、色々に分れて来た唯一の原因は、人が住所を同じくする者以外に、娘妹を与へるやうになつた事である。部落は神祭や又農作の爲にも、集まつて居住する便宜は認められたのであるが、それよりも古い動機は人の子の数を増加し易いこと、即ち集まつて住めば配偶の見つかり易いことであつたらうと思ふ。女が土地に止まつて婚姻によつて直ちに居所を動かなかつた昔風は、是これから出たものとしか説明せられない。多くの有為の男子には、妻問ひは即ち旅行であり、又しばしば新たな移住であつた。

d 嫁入を婚姻の第一日とする風は、疑ひも無く遠方婚姻の必要から出たものである。縁家が他郷にあつては贅入はともあれ、久しく右の婚舎の生活は繰返し得ないからである。しかも親里が娘の労力を人に委付するを惜しんで、少しでも永くこれを留めようと思ふならば、贅を自分の方に迎へて置くといふ方法もあつたのだが、それよりも早く片付けて安心をしようといふ念の方が強くなると、頻しばしばりに引取りを急いで、終に嫁入を儀式的中心とするやうになるのである。

〔明治大正史 世相偏〕

こんなふうにとびとびに引用すると、婚姻史のうえで母系的な招婿婚の風習がしだいにくずれて、一定の期間婿が嫁方に滞在して生活したあと、婿方が嫁が移り住む形ができ、それから嫁入婚にうつりかわつてゆく過渡の者たちが、かいつまんで語られていることになる。それといつしよに母権的な社会から父権的な社会へと移つてゆく過程が、うしろに匿かくされてある。またもつと奥のほうには、太古から中世までの千数百年の歳月が流れているといういい方もできる。それなのに柳田国男は、カンベンに撫なでて通つていただけだという見方も成り立つ。

(b) もつと悪いことに「女が土地に止まつて婚姻によつて直ちに居所を動かなくなつた」招婿婚の「古い動機は人の子の数を増やし易いこと」だと片づけられていることになる。また招婿婚から嫁入婚へうつつた動機が「早く片付けて(親里が娘を)安心をしよ」といふ念の方が強くなると、頻りに引取りを急いで、終に嫁入を儀式的中心とするやうになる」といつた親の思いやりで説明されてしまつている。

婚姻史の理念からすれば、柳田国男の方法と文体はいくらでもあなどることができるといふことができる。働き手ふやしの動機や、娘をはやく片づけた親ごころで、民族の婚姻制や、母権から父権への制度のうつりゆきを片づけてしまふ途方もない考えだということになるからだ。だがそうおもつた瞬間から、柳田の内視鏡の眼と一般婚姻史の外視鏡の眼の(空隙)を無造作にとびこしたことになる。招婿婚から嫁入婚へうつつてゆくには、婚姻史からいえば、太古の民族共同体の内婚制からはじまつて、氏族社会の全崩壊のあとの家族制度

まで、社会史の時間を想定しなければならぬ。これは原始またはアジア的な共同体社会の時期から室町戦乱期までの、すべての時代の経過を内蔵している。柳田はそれを無視していることになる。

だが柳田国男はかれの「常民」の概念が成り立つような、村里の人々の婚姻習俗の変遷に眼をこらしている。

「常民」とは、いわば歴史的な時間を生活史のなかに内蔵し、共時化しているものをさしている。そしてじじつ、時代の支配的な階級の婚姻の実状とうつりゆきを婚姻史とすると、村里の「常民」までおりていったところでは、婚姻の歴史は共時的な習俗にまでヨウシユクをうけ保存されていることになる。この層までおりてくれば、時間はほとんど習俗のなかに停滞し融けてしまっている。

「常民」という概念が成り立つところでは、原始あるいはアジア的な村落共同体を、太古から室町期までの千数百年のあいだつらぬく歴史の時間は、ほぼ共時的な習俗空間の距たりのなかに並列になってしまふ。それといっしょに村里の「常民」の親たちの〈働き手が欲しい〉とか〈はやく娘を片づけなければ〉とかいったひそかなタンソクに歴史意志が象徴されて、招婿婚か嫁入婚かといった選択は親の都合にゆだねられる。そうみなすことができる。柳田の内視鏡的な方法は、通時的な移りかわりが、村里と村里の共時的な距たりに転換されるばあいの、不変の変換項をうちに内蔵している。かれの文体は膨大な資料をつんで、そのままならべ、分類し、方向づけ、結論する過程を、はじめから拒んでいる。これはさり気ない一行を書くために、どれだけ資料をつんだかとはかわらないことだ。(c)かれの文体は、根拠もなく思いつきを書き記すのはじめから拒んでいる。これはどんな主観的な情念の言葉が吐かれていたときでもおなじことだ。

(注) 略々…ほぼ。だいたい。

(出典 吉本隆明『柳田国男論』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (ア) | セン コウ | ① | 先 | ② | 潜 | ③ | 遷 | ④ | 選 | ⑤ | 船 |
| (イ) | カン キ | ① | 木 | ② | 機 | ③ | 企 | ④ | 起 | ⑤ | 氣 |
| (ウ) | カン ベン | ① | 感 | ② | 環 | ③ | 完 | ④ | 寬 | ⑤ | 簡 |
| (エ) | ギョウ シユク | ① | 凝 | ② | 曉 | ③ | 業 | ④ | 形 | ⑤ | 行 |
| (オ) | タン ソク | ① | 淡 | ② | 端 | ③ | 嘆 | ④ | 短 | ⑤ | 胆 |

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同

じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① にもかかわらず ② さもないと ③ これとは反対に ④ しかも ⑤ おなじように

問三 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 生理
② 倫理
③ 背理
④ 逆理
⑤ 論理

問四 空欄

Y

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は

10

- ① 柳田に固有の思い入れに結びついた世界
- ② 事実も理路も捨て去られた果ての世界
- ③ 〈読むもの〉と〈読まれるもの〉が融合した世界
- ④ 内視鏡に映っている世界
- ⑤ 魅力あるイメージで満ちた混沌たる世界

問五

傍線部A「この〈空隙〉の存在」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は

11

- ① 内側から見えることと外側から見えることとの間に隔たりがあること。
- ② 〈読むもの〉と〈読まれるもの〉との間に溝があること。
- ③ 内視鏡に映っている世界を外視鏡から見える像に重ね合わせること。
- ④ 内視鏡と外視鏡とがお互いに相容れない像を既視感として与えること。
- ⑤ 村里の婚姻の風習には理屈では説明できない魅力や魔力が存在すること。

問六 傍線部B「この層までおりてくれば、時間はほとんど習俗のなかに停滞し融けてしまっている」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

- ① 歴史的な時間を生活史の中に内蔵させた場合、習俗の変遷は停滞してしまうということ。
- ② 村里の人々の婚姻習俗の変遷まで考慮した場合には、時間と習俗は融合しているということ。
- ③ 共時的な習俗にまで還元された場合には、常民の概念は成り立ちえないということ。
- ④ 常民という観点から考えた場合、時代の支配的な階級の婚姻の実状とつりゆきを問題とすることができないということ。
- ⑤ 常民という観点から考えた場合、通時的な婚姻史が共時的な習俗に解消されてしまうということ。

問七 傍線部C「不変の変換項」とあるが、これが具体的に意味するものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

- ① 常民
- ② 歴史意識
- ③ 習俗空間
- ④ 外視鏡的な方法
- ⑤ 柳田の文体

問八 本文 の中の a、b、c、d の文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 14

- ① b—d—c—a
- ② b—c—a—d
- ③ c—b—d—a
- ④ c—a—b—d
- ⑤ b—d—a—c

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15

- ① 柳田国男の文体を読んだ時に感じる既視感を、その民俗学的な成果を問題とすることなく論じるためには、内視鏡的な観点が必要になる。
- ② 柳田国男の文体や方法は、読者が無意識のうちに日本の村里の習俗の内側にいる感じをもつことを前提としている。
- ③ 村里の婚姻の風習は、その内側から見た場合、環オセアニア圏の島嶼であり、東南アジア、東アジア、シベリア沿海で大陸に接した小さな列島の原住民の婚姻風習でもある。
- ④ 既視感情の反復が空隙をもたらし、このことが柳田国男の文体と方法を表現しようとする試みに困難をもたらす。
- ⑤ 婚姻史の理念から見た場合には柳田国男の文体は問題にもならないものであるが、柳田国男は故意にこの点を無視して自分の論述を進めている。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

かなり昔のことなので詳しいことは忘れてしまったが、生徒が尋ねて先生が答えるという形式の物理学関係の本を読んでいたら、「時間」についての次のようなやり取りがあった。

生徒が聞く。

「時間というのはいつからはじまったのですか？」

先生「ビッグバンの前は、物質も空間も時間もなかった。だから強いて言えば、時間はビッグバンからはじまったといってもいいかもしれない」(1)

私はそれを読んで、ソボクに思ったものだった。

だけど、仮に物質が何もなかったとしても時間は過ぎていくんじゃないの？

空間は広さだから、何もなくても広さはあるんじゃないの？

おそらくそれは、たいていの人間が感じる疑問だろう。

いつぼう、アインシュタインは、リーマン⁽⁴⁾キル学を取り入れた一般相対性理論を展開し、宇宙は空間的に閉じており、「有限だけれど、中心もなければ果てもない」と説明した。宇宙空間は大きくゆがんでいるというのである。そして、この説明によって「宇宙はどんな形なのか、宇宙に果てはあるのか」についての一つの答えは得られたと考える研究者も多い。(2)

(a)である。いずれにしろわれわれは「相対性理論が理解できない」という理由からではなく、^A空間的に閉じられた宇宙を、リアリティーをもって感じることはできない。それで、その向こうは？ と、ついつい考えてしまうのである。

時間については、時間の存在そのものに疑問が向けられている。アインシュタインが友人に宛てた手紙の中で、「過去、現在、未来という考え方は幻想にすぎない」と書いたのは有名な話である。(3)

動物行動学の視点からは、「空間や時間が、ホモサピエンスという動物種の脳によって生み出されている感覚にすぎない」ことは当然だと考えられる。それらの感覚は、ホモサピエンスが生存し繁殖する上で有利だったから生じた脳の働きにすぎない。

いっぽう、だからこそ、ホモサピエンスの生存・繁殖に有利にならないような空間や時間に関連する思考を、リアリティーをもって感じることはできないし、そもそも実体として存在しない空間や時間を科学的に解明することはできないのではないだろうか。そして私は、このような問題の中に、われわれホモサピエンスという動物の理解の深化に重要な要素が含まれていると思うのである。

「時間のはじまり」や「宇宙のはじっこ」についてはひとまず横に置いて、「脳のクセ」ということについてお話ししたい。

「クセ」という表現は、私がこれまで書いてきた本や雑誌の中で何度か使ってきたものである。この言葉で表現したかったことは、おおよそ次のような内容である。

「ヒトの脳は（他の動物でもそうであるが）、外界から、光や空気の（ウ）シンドウなどの刺激を何でも取り込んで、それらを偏りなく客観的に解析するような情報処理器官ではなく、取り込む刺激の種類や解析の仕方について、かなり偏りをもった情報処理器官である」その偏りをより直感的に一般の方に理解していただくためには、「クセ」という言葉が適しているのではと思ったのである。そして、ついでに本書の結論めいたことを申し上げておけば、「脳の情報処理の偏りは、ヒト、つまりホモサピエンスが、進化的に誕生した生活環境の中で、次の世代に自分の子どもを残しやすい（正確に言えば、各々の遺伝子が次の世代に自分のコピーを伝えやすい）ような偏りになっている」ということである。

物理学や哲学の分野でしばしば論じられてきた問題の中に、次のようなものがある。

「人間はさまざまな測定機器や、数式を含めた理論を作り上げ、生身では知覚できないような物質の構造や宇宙の歴史などについて理解を深めてきたが、結局のところ、実在（真の外界）に到達できるのか、実在を真に理解できるのか？」

動物行動学の視点から言えば、無理である。それは主に次のような理由からである。

確かに人間という動物は、他の動物とは比較にならないほど、事物・事象の因果関係について、それらを取り巻く広い範囲の要素を取り込み、階層性が高い因果関係を追究することができる動物である。だからこそ、他の惑星に行つて戻つてくるような機械も作ることもできた。（b）、それはあくまで人間の脳が知覚できる情報の範囲の中で達成できたことである。

たとえばオオカミは、彼らの脳が備えている能力を駆使して、先回りや挟み撃ち等の方法を生み出し、狩りの仕方を上達させていく（人間が、自分たちの脳の能力を駆使して機器類をより高度化すると同じことである）。しかし、そこには限界がある。たとえば彼

らの脳には、(狩りに)「道具を使う」という発想はけつして生まれぬ。それはオオカミが生きて子を産し、地球上で生存し続ける上で必要ないからだ。同様に、オオカミにとって外界に冥王星が存在することなど思いもよらない。その原因は、オオカミの脳の神経構造にある。そして、同じことは人間についても言えるのである。我々の脳に備わっている神経構造にはけつして思い描くことさえできない実在が数限りなく存在する、と考えることは極めて(甲)なことである。

ちなみに、オオカミが認知する環境世界も、人間が認知する環境世界も、実在としての外界から乖離かいりしたものではない点は強調しておくべきだろう。動物行動学の祖とみなされるコンラート・ローレンツ氏が、「現代生物学の立場から見たカントの『アプリオリ論』と題した論文の中で論じたように、地球上にある期間永らえた生物が認知する外界はすべて、実在の外界の一面を正しく反映し、写し取った認知世界である。そうでなければ(つまり、各種の動物たちが認識する世界が外界と全くずれているものだったとしたら)、オオカミもアマガエルも、実在の世界の中で代々、生き続けることはできなかったであろう。ただし、それぞれの動物種が生存する環境によって、写し取る部分や、写し取るやり方(どのような波長の光を使うのか、音を使うのか、二オイを使うのか、そしてそれらを脳内でどのように処理するのか等)は異なっている。実在世界の反映の仕方が異なっているのである。

そして、ここで言う「種によって異なる写し取る部分や、写し取るやり方」が、人間も含めた、それぞれの種の脳のクセの一部と言ってもいいだろう。(中略)

さて、あらためて「人間はなぜ、『時間のはじまり』や『宇宙のはじまり』をリアリティーをもって想像することができないのか」について考えてみよう。

結論から言えば、時間や空間という感覚は、人間という生物の(乙)として脳に備わっているクセが生み出した感覚に過ぎないからである。(4) もちろんそれは全くの(4)カクウの感覚ではない。外界に存在する何らかの特性(それを人間が完全にとらえることは永久にできない)の一面を反映した感覚である。(5)

「ホモサピエンスが進化的に誕生した本来の環境」の日常生活の中で、数日前、数カ月前、自分がまだ子どもだった頃、といった感覚は、われわれの生存にとって重要な感覚であり、それをわれわれは「時間」という言葉で表現する。(c)、そういった感覚をリアリティーをもって意識できるような脳の特徴がわれわれには備わっているのである。

「空間」についても同じである。距離についてだけ考えても、手と手の間の距離、自分と相手（人間）との間の距離、狙った⁽⁴⁾「エモ」と自分との距離、狩猟採集に出かけたときの居住地と今いる場所との距離といった空間の感覚は日常生活を生き延びる上で重要だったろう。だから、そういう「空間」感覚をリアリティーをもって意識できる特性が、われわれの脳には備わっているのである。

もちろん、このような時間感覚や空間感覚は、現代においてはさまざまな精密機器などの助けも借りて、X。しかし、数万年とか数万キロといったレベルになると、脳もリアリティーをもって想像することは難しい。ましてや「時間のはじまりはいつなのか」「宇宙はどこまで広がり、その端の向こうはどうなっているのか」といった内容をリアリティーをもって想像することはできない。脳は時間そのものの実態や、空間そのものの実体を知っているわけではないからである。あくまでも人間の生存・繁殖がうまくできるように設計された脳には、備わっていない性能だからである。

科学とは「より再現性の高い、そして、より多くの現象の原因を理論的に説明できる仮説に向けて、仮説を改良し続ける作業」と言ってもよいと思う。そしてその際、科学者が使える認知は、ホモサピエンスにもともと備わっている認知様式（つまり、クセのある脳の活動様式）だけなのだ。その様式は学習によって、ある限界の中で修飾されたり、複数の様式が組み合わされたりすることはあるが、質的に、もともと脳内に存在しない様式が生み出されることはない。

次の文章は、イギリスの物理学者ポール・デイヴィス氏が科学雑誌「ニュートン」（2013年10月号）のなかで、インタビューに答えて述べたものである。

∴時間を、「すでに過ぎ去った過去」や、「この瞬間にはまだおこっていない未来」に、単純に切り分けることはできないということ。〈中略〉

もしかすると、時間と空間は、この世界の根源的な存在ではないのかもしれませんが。時間と空間は、より深いレベルの「何らかのもの」から出現してくるものなのかもしれません。

どうだろう。私には、この膨大な理論と計算にも支えられた発想が、すばらしく高度ではあるが、あくまでもホモサピエンスに備わ

っている認知様式だけを駆使した、どうしてもその認知の限界を破れない発想に思えるのだ。オオカミはやはり道具の使用を、あるいは銀河系の存在を認知してはいない、と思えるのだ。

同時に、「より深いレベルの『何らかのもの』」の性質の断片が、科学的に理解できたとして、その次は？ もちろんそこで「実体」の理解は完了しない。

科学にできることは、外界の事物・事象の断片に関する因果関係を、ヒトに可能な認知様式の範囲内で見出し、よりよい仮説に近づけていくことだけなのだ。真実そのものには永遠に到達することはできないのだ。

(注) アプリオリ：認識・概念などが後天的な経験に依存せず、論理的に経験に先立つものとして与えられていること

(出典 小林朋道『人の脳にはクセがある』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 16、(イ) 17、(ウ) 18、(エ) 19、(オ) 20

(ア)	ソボク	①	木	②	僕	③	朴	④	睦	⑤	ト
(イ)	キカ	①	加	②	化	③	科	④	下	⑤	何
(ウ)	シンドウ	①	伸	②	真	③	深	④	振	⑤	進
(エ)	カクウ	①	可	②	架	③	過	④	寡	⑤	化
(オ)	エモノ	①	獲	②	得	③	柄	④	餌	⑤	会

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 21、(b) 22、(c) 23

- ① しかし
- ② また
- ③ ただし
- ④ だから
- ⑤ もちろん

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）、（乙）

（甲）

- ① 抽象的
- ② 合理的
- ③ 具体的
- ④ 積極的
- ⑤ 事務的

（乙）

- ① 生存競争
- ② 解析機能
- ③ 適応戦略
- ④ 情報器官
- ⑤ 日常行動

問四 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

- ① 規模が無限になっている
- ② 規模が拡大している
- ③ 規模が縮小している
- ④ すべてを把握することができる
- ⑤ 正確に計測することができる

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 27

しかし、「時間(の流れ)が幻想だ」と言われても、われわれの脳はその説明にやはり抵抗するだろう。

- ① (1) ② (2) ③ (3) ④ (4) ⑤ (5)

問六 傍線部A「空間的に閉じられた宇宙を、リアリティーをもって感じることはできない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 28

- ① ホモサピエンスという動物種は、進化の過程で宇宙の特徴である「有限だけれど、中心もなければ果てもない」というものを他に経験したことがないから。
- ② 時間と空間は、この世界の根源的な存在ではなく、より深いレベルの「何らかのもの」から出現してくるものであるため、日常生活に埋没している人間の脳では理解することができないから。
- ③ アインシュタインが展開した一般相対性理論による宇宙の説明は、物理学の研究者には受け入れられたが、一般的なわれわれにはとても理解できる内容ではなかったから。
- ④ 人間の脳は空間という実体を知っているわけではなく、人間という生物が日常生活を生き延びる上で重要だった空間感覚はリアリティーをもって意識できるが、それを超えたものは理解する構造となっていないから。
- ⑤ 時間や空間は実体をもたないため、時間や空間というものは生身の人間では知覚できるものではなく、人間の脳のクセとして、生み出されるカクウの感覚であるから。

問七 傍線部B「脳のクセ」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 29

- ① 脳は、生存や生殖に有利にならないような空間や時間に関連する思考を感じることができないということ。
- ② 脳は、生活環境の中で、生存し生殖する上で有利なような偏りをもった情報処理器官であるということ。
- ③ 脳は、空間や時間といった実体のないものについても想定できる機能があるということ。
- ④ 脳は、生身では知覚できないような物質の構造や宇宙の歴史を理解できる構造であるということ。
- ⑤ 脳は、生存し生殖する上で有利な空間や時間といった感覚を生み出す習性があるということ。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 30

- ① オオカミの脳には、狩りに「道具を使う」という発想はけっして生まれませんが、これはオオカミの脳が人間の脳に比べて進化していないからである。
- ② オオカミやアマガエルは、生存する環境によって世界を写し取る部分や写し取るやり方が異なるため、その認知する環境世界は、実在としての外界から完全に乖離している。
- ③ ホモサピエンスが、日常生活を超えた空間や時間であっても、精密機器などを利用してすべてリアリティーをもって感じられるのは、脳がもっているもとの機能による。
- ④ 科学の目的は、外界の事物・事象の断片に関する因果関係を、ヒトに可能な認知様式の範囲内で見出し、「より深いレベルの「何らかのもの」」を理解することである。
- ⑤ 科学の営みであっても、科学者が使える認知は、ホモサピエンスにもともと備わっている認知様式だけであり、すべての「実体」を明らかにすることはできない。

